時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり　時事新報には每號詳細なる商況物價の報告あり

時事新報

第三千二百五號
明治廿四年十二月六日　日曜日
舊曆辛卯十一月六日（丙、寅）
日　出午前六時三十八分　入午後四時三十六分
月　出午前十時四十九分　入午後八時五十三分
滿潮　午前八時九分　午後八時三十一分
（西曆一千八百九十一年）

時事新報定價

時事新報は每號八面乃至十二面にして詳細の商況物價報告あり其代價遞送料廣告料は左の如し

一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓〇一箇年前金六圓〇月曜日休刊

〇時事新報社ヨリ直接ニ郵送スルモノハ右定價ノ外ニ一箇月十三錢ノ郵送料ヲ申受ク

時事新報廣告料（前金）

一行五號活字廿四字詰	一日限	一日以上六日迄	七日以上
一行ニ付	十三錢	十一錢	十錢五厘

本社へ寄稿に付

東京府下を始め各府縣に通信社なるものありて是より各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を裝飾するより各社同一の記事を掲ぐるもの尠からず獨り時事新報社は社員並に通信員の多きを以て斯類の社に通信を依頼せずと雖も世間往々此事を知らずして通信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信ずる方多きが如し爲めに行違ひを生じたる場合も尠からざれば本社に記事論說を寄稿せんとする方は直接に本社に向け發送あらんことを請ふ

時事新報

國會解散

昨今議會の風說に據れば今期の議會は官民共に意氣組み頗る盛にして其間の衝突は到底免る可らず政府にても既に解散の覺悟を定め內々その用意に着手したりなど傳ふるものあり抑も官民間の反目は年來の事にして其由來の至て深きものなれば突然政治の討論場を開き官と民とを直接に接せしむるは恰も火と水とを混交するに異ならず衝突は固より眼前の事にして策の得たるものと云ふ可らず左れば政府に於て愈々豫約の通り國會を開くの覺悟ならば何は兎もあれ其開設に先ちて從來の官制を改め當局者自から卒先して質素儉約を勵み[illegible]冗費を節減し繁文を省略し稅目を改正する等以て全國の民望を收めて反對の感情を消滅せざる可らず我輩は幾回か注意勸告を試み丁寧反覆力を盡して論じたれども當局者には曾て其邊の考もなかりしか政府の政略は日に依然として是れと云ふ決斷もなく[illegible]徘徊躊躇の間に時日は早く過ぎて國會開設の期限と爲り會場は目出たく開けたれども其有樣を見れば前期の通りの次第にして年來の感情は依然の討論に發表し而も益々增長を致した[illegible]今年の成行を想像するに其大[illegible]事宜に依りて或は解散あるや[illegible]るやも知る可らず事の成行として敢て[illegible]或は國會の解散と云へば何か非[illegible]る者もあれども立憲[illegible]時の[illegible]に由[illegible]進んで國會を解散するかの外に策ある可らず如何とあれば斯くの如くならざれば政機の運轉を活潑ならしむること能はざればなり故に國會の解散は立憲國に免れざる出來事にして或は政機の澁滯を滑にするの方便と云ふも可なり敢て心配に及ばざるものなれども唯我國の實際に之を行ふて其結果の如何なる可きやは今日に當りて宜く研究す可き所なる可し

解散の結果を考ふるに其原因は何れにしても政黨內閣の機運を早むるものと云はざるを得ず政府が國會を解散するは取りも直さず全國輿論の向背を卜するものにして此場合には再選擧に必ず多數を制するか然らざれば斷然自から退くの覺悟なかる可らず而して多數を製せんとするには從來の如く超然主義に安んじて袖手傍觀するは勢の許さゞる所なれば假令ひ當局者が自から其衝に當らざるも自から同志の政友を求めて陰に陽に撰擧の競爭を試みざるを得ず今日の事情に於ては政府の手配さへ行屆けば或は多數を制することもある可しと雖も既に撰擧の爭に關係するときは表面の手段は如何にしても實際は政府黨を形造くるものにして其成行は議場に政府黨と反對黨と兩者の對立を致し其爭を公にするものなるが故に一時の勝敗は兎も角もとして勢の至る所は遂に政黨內閣の實を見ざるを得ず故に其結果を云へば國會の解散は唯政黨內閣の機運を早むるのみにて敢て憂ふるに足らざるものなれども尙は其道行の實際を觀察すれば更に一考す可きものあるが如し

政府が愈々覺悟を定め解散を斷行して更に撰擧を爭ふときは或は多數を制することもある可し當局者の爲めに謀りて誠に目出度き次第なれども或は其反對に政府が解散を試みて再撰に多數を失ふこともあらんには順序より云へば內閣辭職の場合なれども今日の事態に於ては都て政治上に敢斷の擧動を許さゞるが故に斯る場合には外に反對を見ると同時に內に不折合生じて其不折合ある紛紜の爲めに或は更迭を見ることもある可し即ち其更迭は直接に國會議場の失敗より來るに非ずして依然たる情實部內に行はるゝ舊筆法の更迭たる可きのみ斯くて國會は屢々解散に遇ふも反對の感情は毫も減せず政府は屢々更迭するも更に其色を變せざるときは政治社會は果して如何なる有樣に陷る可きや之を想像するに難からざる可し左れば國會解散の爲めに政府黨と反對黨との分立を促し次第に政黨內閣の氣運に傾くは一應喜ぶ可きが如しと雖も更に實際の成行を考ふれば却て反對の現象を見て容易ならざる災を招くこともある可し故に我輩は敢て解散其事を嫌ふには非ざれども事後の成行を察して之に處するの成算もなく單に一時の感情の爲めに之を斷行し一國政治の秩序をして國會解散の一事に痲せしむるが如きは經世家の事に非ざるべしと信ずるなり

[illegible]

蝙蝠が斧、龍車を覆す（外國笑話意譯）

法螺尾福太郎は田舍にて小手の利たる能辨才子所謂鳥なき里の蝙蝠にして年の頃は二十四五にてもあらんか、東京へは二三度往通ひし又諸國をゴロッキ歩行きたる廉をもて村にては誰とて口答への出來ぬ物知りなり扨も福太郎は此度、同村の長者、孫十旦那が東京の見物秘藏の娘お丸も同行と聞き込みたれば是非お隨行いたしたいもと直に本氣に申し入れたるにぞ此方は固より望む所なり殊に彼奴は才子あれば事に由たら死水も汲で貰ひたく夫れに娘も如何やら餘り外々しき素振も見せずと深く心に思案して承知致せりと計りの返答に驄て共々東京へ出で來りけるが或る日、福太郎は强顏しくもお丸さんと御一處に動物園の見物に參りたう御在ますと云ふに孫十夫婦はイヤ夫れは止しにさッしやいと否めども固より鐵面皮の福太郎なれば押返して旦那、夫りや田舍ではさうでも御在ませうが東京じや今時そんなお野暮は云ひませんぜ是ッ非お孃樣のお隨行を願ひますと云ひけるにぞ唯何事も不案內の老人夫婦、夫れだと云ふて世間體もあるみッちやに由て如斯しなさい乳母のお角のを作れて行かッしやいと云はれて心中竊かに不平なれども愛等が淺く勝つと云ふ奴だと思案してヘイ宜しうがす夫んならお角さんと野生がお孃樣のお隨行と致しやせうと相談漸く整ひ三人打ち伴れ立ちて動物園の中へ入りけるが先づ第一に觀たるは丹頂の鶴なり其處で

福太郎　みんな容色の惡い鶴は見たことがありやせん

お丸　夫れでもあの嘴は見事に尖ッて居るじやないか

ヰ　尖ッて居るたッて何だッて彼奴の嘴は小楊枝見たやうなもんです夫れに引替へ野生が先年那須野ヶ原で掘み殺した丹頂の鶴は夫りや如斯ヤニッコイ物じやありませんでしたぜ野生の背中を忌と云ふ程突き通し上ッて夫れが爲め今に野生の背中にや五寸四方の穴が開いて居ますぜ阿孃は御存じありませんか

と兎角、强氣の大言を吐く福太郎が心の底と云ッばお角は平々凡々の田舍婆ァにして取るに足らず又お丸とて唯白粉をコテ〳〵塗り付けて旗色の紅を落すまじとれ赤口をスゥ〳〵ホゥ〳〵やりながら唇を庇保て居る阿太福なれば容色の良いの惡いのと論に成たる貨物ではなけれども何にしても長者の娘たるには相違なければ都合に由ッちや養子に成ても辭退はせぬと飽くまで圖太き所存なれば兎角お丸に首たけ思ひ付れんとの計策あり此方も否にはあらぬ稻丹の誘ふ水もあらば流れ寄りたき風情にて唯感服して福太郎が功名談を聽くのみ

お丸は之を聞いてお前の背中の疵は未だ見たことがないと云ふにぞ何れ其中、御覽に入れませうと歩みを運ばし其次ぎの檻の中には二三疋の獸ありて羆と貼札したりお丸は之を見て

オヤマア爰には羆と云ふものが居るよと云ふに

福太郎は透かさずみんなお畜生は驚くにや足りやせん野生がエーと夫れ〳〵文政二年の江戸の大地震の翌年、北海道で羆を殺したことがありやしたけが

と云ふに[illegible]お丸は驚きて

オヤマア[illegible]お前は羆を殺したことがあるの

[illegible]

だッ野生や鐵彈で熊を百疋、
ありやしたが是れしきの事に
へと實は未だ宅の阿母にも話
だが何故、羆と云ふんだろ
と此問には流石の福太郎も
して
何故、羆と云ふとエヘン〳〵・
或は于と云ふこともあり昔
踏み迷ふたとき折りしも木
ふべうもなし如何はせんと
火やうの物見ゆるにぞ情ある
定めもせず是れ幸と驄せ付
火にあらで白き熊の脊中に
れば老人は忽ち彼れに食はれ
の內君は之を聞いて愁傷いけ
して彼の熊を擊ち取らせ于
百年を契りたる我が伕の在す
け日每に香花を手向けしと云
また于熊と云ふ所以なり羆の
とぞ陳べ立てけるがお角は
釋を聽て痛く福太郎が博學
色を顯しつゝ又打ち伴れ立

お丸　オヤマア恐い鳥だみ

福太郎　みはいと仰ッしや
ありやじません野生が紀州
ち落した三疋の鷲は實にお目
の目方が三八、二萬四千貫目
蛻は今、奈良の東大寺に納め
とお丸は之を聽て疑ふには
して

オヤマア眞實かエ

と云ふにぞ見透かされては
眞實だッて虛言だッて野生と
つかれた義理じやありやすま
めし始めより
と苦しまぎれのさはり文句の
聞き咎め
是れはシタリ福太郎どんお前
間柄あんだ妙なことは聞
とキッパリ一本きめられて

福太郎　アヘ、弘法も筆の
文句は願ひ下げす時に御覽を
は是れぞ即ち丹波の國より生
ります

と云ふにぞお丸お角は若し
とは思ひしが固より博學多才
氣力もなければ又如何ある
待ち居りけるに此度は最と勇
野生も實は如何かして虎に遇
けて居やしたが既に先日も近
の形をチラと見たから直、退
流石猛獸と聞えたる虎も野生
ん早や逃げ去りて影だも止
來ると本意ないこともあるの
[illegible]